平成２１年５月学術講習会

（社）日本鍼灸師会
（社）東京都鍼灸師会　主催

厚生労働省後援　通算 689 回
(2009.5.24)

演題および講師

整形外科疾患

Ⅰ．「肩関節疾患の診察所見」

聖路加国際病院整形外科 肩関節スポーツ専門診　田崎 篤

鍼灸治療編

Ⅱ．「上部消化管症状に対する鍼灸治療」
—効果と機序—

明治国際医療大学 臨床鍼灸学教室　准教授　今井 賢治

「肩関節疾患の診察所見」

田崎　篤

肩関節は難しいと言われ、診断治療に難渋することが多い。しかし代表的疾患と各々の病因、診察方法、治療方針の原則を理解することで疼痛の確信に迫ることが可能となる。医療者は画像所見のみが診断の要素でないことを承知し、解剖とバイオメカニクスを十分に習熟することで精度の高い診断、治療が可能となる。本講義はそこに重点を置いて作成した。

五十肩は肩関節周囲炎、凍結肩とも言われ、加齢により出現した肩関節周囲の炎

症、拘縮が病因であり、疼痛と可動制限が主訴となる。十分な消炎鎮痛処置を先行して行い、その後に可動域訓練や内在筋トレーニングによる肩関節機能改善が治療方針となる。腱板断裂は特に 60 歳以上に出現し、引っ掛かるような疼痛と筋力低下が主訴である。五十肩との鑑別が大切であり、拘縮の治療を優先させた後、疼痛、機能改善を目的に断裂した腱を関節鏡視下に修復手術する有用性を理解すべきである。腱板断裂は放置することで修復が不可能となるため、不十分な診察、意図の無い保存療法で患者にとって時間の浪費にならないよう注意する。肩関節不安定症は前方や後方の不安定症が主である。“脱臼不安感”と“違和感や疼痛”のいづれが主訴か診察で確定することが重要である。前者が主訴の場合は筋力トレーニングでの改善は困難であるため、不安定症が主訴であれば外科的治療を優先させ、続く機能回復リハビリを十分に行うことが大切である。

聖路加国際病院整形外科 肩関節スポーツ専門診　田崎 篤

「上部消化管症状に対する鍼灸治療」

—効果と機序—　今井　賢治

【はじめに】

消化管症状に対する鍼灸治療は、運動器疾患などに比べて、その機会は少ないかもしれない。どちらかというと、患者は随伴症状として、食欲不振や、胃もた

れ、腹痛、嘔気、下痢や便秘などを訴え、全身調整を目的とした鍼灸治療が多くなされるのではないだろうか。一方、現代では、機能性胃腸症や過敏性腸症候群などのように、機能的な病態もしばしば鍼灸治療で対処している報告も散見されるようになってきた。この領域の鍼灸治療の機会は決して多くはないが、無視できるものではないはずである。今回は、消化管運動（特に胃運動）における鍼灸の作用機序から臨床応用までを概説する。

【消化管運動における鍼灸の作用機序】

体性―内臓反射に関する知見から、鍼灸刺激は自律神経を遠心性に介して、胃運動の亢進や抑制を引き起こすことがすでに示されている。四肢への鍼灸刺激は副交感神経を介して消化管運動を亢進させ、また、体幹部への鍼灸刺激は交感神経を介してその抑制を引き起こすことが明らかになっている。小生も胃電図（注）を用いた研究において、ヒトでも腹部への鍼刺激で胃機能が抑制される結果を確認した。比較的、鍼の作用機序が明らかになっている領域であるため、その概観を解説する。

【臨床応用の事例】

以下の臨床応用の実践事例について紹介する。

- 術後消化管運動抑制における四肢への円皮鍼刺激の改善効果
- 虫垂切除術後に強い嘔気を訴えた症例における鍼通電治療の制吐作用
- 脾虚傾向の程度と胃運動異常との関連性
- 機能性胃腸症患者における鍼通電の治療効果
- 乗り物酔い(motion sickness)に対する鍼治療の応用の試みとその効果

【まとめ】

当該領域における基礎研究の概要から、これを踏まえた臨床応用の実践事例の現状を紹介することで、参加されている先生方と今後の鍼灸治療の展望と方向性

を探りたいと考えている。

（注）胃電図は胃体上部 1/3 辺りに存在するペースメーカーからの電気活動を経皮的に記録する手法で、鍼灸などの微弱な体制刺激の効果を客観的に評価するのに適した手法であり、その利用は近年広がっている。

明治国際医療大学 臨床鍼灸学教室　准教授　今井 賢治